

ルネサンスの社会と古代趣味：16世紀初頭のルカ・シニョレツリによる装飾事業を中心に

森, 結

<https://hdl.handle.net/2324/7182265>

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名 : 森 結

論 文 名 : ルネサンスの社会と古代趣味—16世紀初頭のルカ・シニョレッリによる装飾事業を中心に—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、ルカ・シニョレッリによる15世紀末から16世紀初頭の約10年の間の作品、特に当時の古代趣味を反映している、オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂壁画装飾(1499-1504)、《フィリッピーニ祭壇画》(1508)、シエナのパラッツォ・デル・マニフィコの、カメラ・ベッラ壁画装飾(c. 1509)の3点を主に扱い、三部構成で詳述する。本研究では個々の作品及び装飾事業を、その注文背景や機能、制作に関わっただろう画家以外の別の職人の存在を推定し、論じていくという微視的な視点をもつ一方で、これをルネサンス美術における古代受容という巨視的な視点から有機的に結び付けて論じることを試みたい。

本研究が焦点を当てる15世紀末という時代には、ローマで重大な芸術的出来事が起きている。すなわち、皇帝ネロがローマの中心、オッピア丘の大部分に建設した宮殿、ドムス・アウレアの発見である。宮殿内部の壁画は、発見当時ヴァチカンのシステリーナ礼拝堂装飾事業(c. 1480-1482)へ参加していたウンブリア、トスカーナ地方の画家達を魅了し、彼らは自らの壁画装飾にこの壁画様式を応用した。ドムス・アウレアの発見は、それまで文献でしか伝わっていなかった古代絵画が、初めて白日の元になった瞬間だったのである。宮殿内部には植物や幻獣、器物など異なる種が混交した、後に「グロテスク装飾」と呼ばれる奇想に満ちた装飾文様が描かれ、前述の画家達を中心にしてイタリア全土に普及した。

ルネサンス美術における古代受容を扱う浩瀚な研究においては、古代絵画に比べて、古代石棺の浮彫などの彫刻美術からの影響を論じる研究に比重が置かれている。当時古代絵画を目にする機会が他に無かったことに加え、グロテスク装飾の流入は、皮相的なものに留まるのであり、絵画様式に変革をもたらすものではなかったのである。

しかしドムス・アウレアの発見がルネサンス美術にもたらした恩恵はグロテスク装飾だけではなく。壁画における物語画を、付柱や台座といったイリュージョニスティックな建築オーダーで連結し、絵画空間を実際の建築空間の中で合理的に現前せしめる、所謂ポンペイ第一、第二様式に想を得ただろう古代壁画様式がこの頃導入されたのである。この中心的役割は、15世紀末のローマで幾多の壁画装飾事業を手掛けた、ウンブリア派の画家ピントリッキオ(c. 1453-1513)が担っていたと指摘される。

システリーナ礼拝堂装飾事業にペルジーノの協力者として参加したピントリッキオは、その後ローマに残り5人の教皇に仕え、多くの壁画事業を請け負った。ローマでの活躍後、彼はウン

ブリアを拠点とするが、以降同地でも他の画家達による、見事なグロテスク装飾を伴う壁画装飾事業が展開した。例えばペルジーノによるペルージャのコッレージョ・デル・カンビオ装飾事業（c. 1498-1500）、そして本研究の第一部で論じる、シニョレッリによるオルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾事業（1499-1504）である。

本研究はシニョレッリのサン・ブリツィオ礼拝堂壁画装飾事業と、ピントリッキオが手がけた壁画装飾事業との関連性を指摘する考察をその第一部として、シニョレッリが手がけた15世紀末から16世紀初頭にかけての古代趣味を示す壁画装飾事業を主に扱う。全体を通して見えてくるのは、シニョレッリの作品群における、ピントリッキオ周辺の画家を通してなされただろう古代受容のあり方である。両者は本研究の第三部で論じる、シエナのカメラ・ベッラ装飾事業（c. 1509）において公に協働するにいたっている。

本研究はこうした画家の連帯が、画家同士の個人的な交流からなされたのみならず、事業の委嘱主一権力者との関係が背景に関わっていただろうことを論じる。オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾事業の助言者が、同地の司教座大聖堂助祭アントニオ・デッリ・アルベリーであっただろうことを本研究で取り上げるが、彼は後に教皇ピウス3世となるピッコローミニ枢機卿の秘書を兼任していた。このシエナの枢機卿は、ピントリッキオにシエナ大聖堂のピッコローミニ図書館装飾（1502-c. 1507）を、グロテスク装飾を描くことも条件として、事業を委託した人物であった。故に、教皇領都市オルヴィエートとピッコローミニ家との因縁の歴史も踏まえた上で、アルベリーがサン・ブリツィオ礼拝堂にピッコローミニ枢機卿の古代趣味と政策とを反映させた可能性を本研究の第一部で論じる。第二部では、サン・ブリツィオ礼拝堂装飾事業以降のシニョレッリの祭壇画において装飾的傾向が現れる過程を、《フィリッピーニ祭壇画》を中心に提起論じる。

第三部で論じるシエナのカメラ・ベッラ装飾事業は、ピッコローミニ枢機卿の姪と、シエナの実質的君主であったパンドルフォ・ペトルッチの長子ボルゲーゼとの結婚を祝して、シニョレッリとピントリッキオの両工房に委託された事業であった。本研究ではシニョレッリの事業招聘の背景を跡付けることを主に試みる。その過程で、シニョレッリはシエナのサンタゴステイーノ教会の《ビーキ祭壇画》（1488-1489）によって、シエナの芸術シーンに大きな影響を与え、それまでシエナを統治していた市民党派に代わって、政治の表舞台に復帰しつつあった貴族党派の人々に注目を受けただろうことが分かる。その中には本装飾事業の委嘱主たるペトルッチもいたであろうが、ピッコローミニ枢機卿とその代理人であるアルベリーも、ビーキ礼拝堂に免償を与えており、《ビーキ祭壇画》とシニョレッリの名声をおそらく周知していた。これを勘案すれば、シエナの《ビーキ祭壇画》での名声によってシニョレッリは、オルヴィエートのサン・ブリツィオ礼拝堂と、シエナのパラッツォ・デル・マニフィコのカメラ・ベッラ装飾事業に招聘されるに至ったといえるだろう。これらの装飾事業で導入された古代趣味は、皮相的なものに留まるのではなく、オルヴィエートとシエナというそれぞれの都市内部での党派抗争の歴史において、明確に政治的な意図を持って導入されただろうといえるのである。